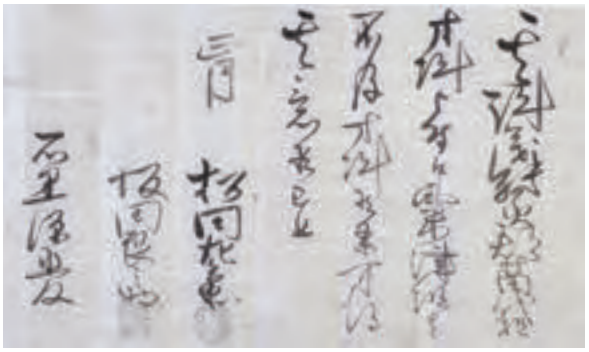
能美郡十村組の変遷

十村は、加賀藩特有の役職で、幕領や諸藩領における大庄屋に相当し、慶長九年（一六〇四）に創始されたといわれている。一村支配の村役人に対し、いくつかの村を集めた組を裁許するもので、十村が管轄する村々を「十村組」といった。郡奉行と改作奉行の配下として、組下の肝煎などを統轄し、藩法令の布達をはじめ、年貢徴収、村々の訴訟の調整など、村政全般を監督・指導にあたるため職務は多岐にわたっている。十村は百姓身分ながら、村支配機構の農民側の頂点に位置し、加賀藩特有の重要な任務を帯びた役職であった。


天保13年（1842）　能美郡苗代組才許御題紙（石黒家文書）

能美郡の十村組は、十村由緒が明らかでないため不明な点も多いが、寛永十八年（一六四一）では、沢村源丞、寺井村孫七、釜清水村次郎右衛門、若杉村八兵衛、犬丸村太右衛門、今江村三右衛門、波佐谷村文兵衛、二曲村与兵衛、土室村六郎兵衛らの十村組を確認することが出来る。能美郡の十村組の変遷を見ていくと、正保三年（一六四六）は一八組、寛文十年（一六七〇）は一〇組、天保十年（一八三九）は七組となっている。このように時代と共に十村組の数は減少し、大組化していく傾向にある。能美郡の十村組では一〇組編成の時代が最も長かった。

十村組名は、最初十村の名前をとり沢村源丞組、犬丸村太右衛門組というように呼ばれていた。ところが文政四年（一八二一）に十村制を廃止し、年寄制を実施した際、地域名を附した山上組、板津組などと名称を変更した。この時の能美郡の十村組数の変化はなく、所属村も各組一村程度の出入りで殆んど変わっていない。ところが天保十年三月にも組割替があり、この時は組数も一〇組から七組へと大組化し、所属村も大幅に組替えられた。具体的には、苗代組・軽海組・板津組・粟津組・徳橋組・山上組・北板津組の七組で、明治維新まで存続している。

（袖吉正樹）

元文2年(1737)　加州能美郡図籍(金沢市立玉川図書館　加越能文庫)　郷毎に色分けされており、十村組の範囲を推定することができる

能美郡十村組の変遷

	正保3年（1646）		寛文10年（1670）		文化5年（1808）		文政7年（1824）		天保12年（1841）	
組数	十村組名	村数	十村組名	村数	十村組名	村数	十村組名	村数	十村組名	村数
1	荒谷村少兵衛組	17	土室村平右衛門組	36	波佐谷村文兵衛組	37	軽海組(元沢組)	25	苗代組	29
2	長野田村九郎右衛門組	15	寺井村市郎右衛門組	45	沢村源右衛門組	25	北板津組(元左源次組)	36	軽海組	38
3	金平村二郎右衛門組	18	犬丸村惣右衛門組	24	下吉野村十左衛門組	11	東山上組(元釜清水組)	14	板津組	33
4	今江村二郎兵衛組	9	八日市村五右衛門組	33	釜清水村所兵衛組	12	苗代組(元野々市先組)	33	粟津組	38
5	小松町組	5	埴田村五郎兵衛組	19	今江村源介組	17	板津組(元白山組)	36	徳橋組	34
6	白江村長右衛門組	15	荒谷村少次郎組	17	若杉村八兵衛組	33	粟津組(元今江組)	17	山上組	38
7	上野村勘十郎組	17	瀬領村文兵衛組	11	埴田村清作組	22	山粟津組(元波佐谷組)	11	北板津組	39
8	三坂村宗兵衛組	15	金平村次郎右衛門組	25	犬丸村与右衛門組	36	山軽海(元三坂先組)	18		
9	大杉村四郎右衛門組	1	二曲村与兵衛組	18	三坂村吉次組	18	徳橋組(元埴田組)	22		
10	沖村組	5	河原山村十右衛門組	12	寺井村宗右衛門組	36	山上組(元犬丸組)	37		
11	犬丸村宗右衛門組	21								
12	本江村宗右衛門組	9								
13	中村藤右衛門組	11								
14	宮竹村次右衛門組	44								
15	高堂村次兵衛組	18								
16	寺井村八兵衛組	8								
17	粟生村次郎兵衛組	3								
18	湯谷村宗左衛門組	7								
合計		238		240		247		249		249

註(1)　正保3年は「加能越三ケ国高辻帳原稿」(金沢市立玉川図書館　加越能文庫)より作成。
(2)　寛文10年は「加州三郡高免付御給人帳」(石川県立歴史博物館　後藤家文書)より作成。
(3)　文化5年は「御領国中村名帳」(金沢市立玉川図書館　加越能文庫)より作成。
(4)　文政7年は『加賀藩農政史考』(小田吉之丈著)より作成。
(5)　天保12年は「御領国中村名附帳」(金沢市立玉川図書館　加越能文庫)より作成。